

報 告

障害のある子どものレクリエーション活動における 家族のニーズに応じたプログラムに関する研究 —保護者へのインタビュー調査から—

山本 佳代子* 通山 久仁子*

＜要 旨＞

筆者らは、本学において障害のある子どもとその家族を対象としたレクリエーション活動「チャレンジ」を実施している。本研究は、この活動に参加している子どもの状態像、および保護者のニーズを把握することを通して、参加している子ども一人ひとりに適したプログラムを提供することを目的として行った。研究方法は、活動に参加している子どもの保護者を対象に、1対1の半構造化インタビューを行い、KJ法による分析を行った。

抽出された《プログラムの有効性と子どもへの効果》、《プログラムへの評価と課題》、《学生ボランティアへの評価と課題》、《家族支援の有効性》、《障害のある子どもの家族が抱えている困難》の5つのカテゴリーと19のサブカテゴリーから、プログラムの立案と運営における課題について考察した。

キーワード：障害のある子ども、レクリエーション、学生ボランティア、保護者

I. はじめに

近年、障害のある学齢期の子どもの放課後を支援する取り組みとして、大学等の教育機関で教員と学生ボランティアが主体となり、子どもたちに集団支援のプログラムを提供する活動が行われている。これらの集団支援では、子どもたちの社会性を育てることを目的として、「遊び」や「レクリエーション」を通した集団活動を行っていることが多い。清水（2001）では、学習障害のある子ども達が活動を通して他の子どもと関係がとれるようになったことなどを報告している。また浦崎（2007）でも、発達障害のある小学生への集団支援が、集団の場で衝動をコントロールし、集中力を持続することにつながったことや、他者と楽しみを共有する体験が社会性を育てることにつながったことを示している。

このように障害の有無に関わらず、子どもの発達や生活の質・豊かさ等の面で、「遊び」が重要な役割を果たすということはよく知られている。野村は、「遊びを育てることは『生きる力』を育てること」（1999:

はじめにii）だと述べ、作業療法士として子どもの遊びに関わってきた体験から、障害のある子どもが仲間と遊ぶことの重要性や、子ども同士で共感することの大切さ等を示している。また特別支援教育においても、「遊び」は重要な教育として位置付けられており、「遊び」が、「身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくものである」ことが明記されている。（特別支援学校学習指導要領解説—総則等編—第2部—第3章）⁽¹⁾。

筆者らは、障害のある子どもとその家族を対象として、子ども達の余暇活動支援、健康の維持・増進、保護者同士の交流などを目的に、スポーツ・レクリエーション活動「チャレンジ」を継続的に実施している。これは月2回、子どもたちの放課後におよそ90分間のプログラムを提供する活動であり、支援者として教員1名（筆者）と学生ボランティア約10名が参加している。活動には現在13名の子どもが参加しており、活動中、保護者は体育館内で活動を見学するとともに、保

* 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科

護者同士で情報交換を行っている。活動の概要を表1に示す。

活動は表1のようなプログラムに沿って実施されているが、参加している子ども達は、障害の特性上、独自の強いこだわりがある場合や、対人関係における困難さを抱えている場合があり、プログラムに沿って活動に参加することが難しい子どもも多い。したがって活動では、子どもに対して学生ボランティアが1対1で対応し、自由な雰囲気の中で、リーダーが進行する体操や鬼ごっこ、遊び、工作活動などに参加している。90分間通して集団での活動を行うことは、参加者にとっても支援者にとっても負担が大きいが、集団での活動を苦手とする子ども達であるからからこそ、興

味や関心を引き付けやすい「遊び」によって集団の中で皆と場を共有する力を養い、他者と関わることの楽しさを体感することが可能になると考えられる。

障害のある子どもにとって、他者と共に遊びを楽しむ経験の蓄積は、学校での教育を終え、社会に出て、そして地域で生活していくときに必要な社会性を育むきっかけになる。しかし「チャレンジ」に参加している子ども達は、同年齢の子ども達に比べ、外遊びや、放課後友達と遊んで過ごす経験が乏しく（山本2012）、友達と「遊び」を共有する体験や楽しさを感じる機会が少ない。そこで筆者らの活動では、集団から外れてしまう子どもに対して、それぞれの子どもの世界を尊重しつつ、タイミングを見て随時集団への活

表1

「チャレンジ」活動概要		
活動日時	毎月第1・3木曜日 16:30-18:00	
活動場所	大学 体育館	
対象	障害のある子ども（きょうだい児含む）約10名	
支援者	福祉学科教員1名・福祉学科学生ボランティア約10名	
参加費	無料（但しスポーツ・レクリエーション傷害保険代として630円/年が必要）	
活動内容		
<p>プログラム例</p> <p>【フリータイム】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・到着した子どもから好きな道具を使って遊ぶ <p>【あいさつ】参加メンバーの確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名前を呼ばれたら返事をする ・友達、スタッフを意識する <p>【体操】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストレッチ体操などで体をあたためる <p>【歩く・走る】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前歩き・後ろ歩き・横歩き・スキップ・けんけんなど ・色々な動物歩きをする <p>【鬼ごっこ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「しっぽをとられないように逃げる」と「しっぽを取りに行く」を役割交代しながら楽しむ <p>【ビーンズバッグ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・左右持ち替え、身体の周りを回す ・身体の部位をこする、のせるなど ・投げる <p>【ふりかえり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボードを見ながら、今日の活動を振り返る 	<p>ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場や人に慣れて、心と身体をリラックス ・好きな活動を楽しむ ・呼名、返事のやりとりをする ・友達やスタッフを知る ・様子を見ながら体調確認も行う ・怪我防止 ・色々な動き方で移動する ・身体意識、空間認知を育てる ・ぶつからないよう相手の動きを意識する ・順番を守る練習をする ・動きの操作性を高める ・走りながら進行方向を変える、急に止まるを体験する ・長時間走る力をつける ・ルールを理解する ・身体の部位を知る ・両手を同時に使って調整力を高める ・バランス力を高める ・動きの基本動作を習得する ・ビーンズバッグのやりとりを通して仲間と関わる ・楽しかった体験を自分の言葉で仲間に伝える 	<p>支援者の配慮すべき点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども達の自発的な行動を大切にする ・できるだけ全員揃って行えるよう促す ・伸ばすところ、縮めるところなどポイントをおさえながら補助をする ・一人ひとりのペースを大事にする ・動きに合わせた声掛けをする ・手本となる動きを一緒にする ・順番が守れるよう待つ場所を一人ひとりに分かりやすく提示する ・しっぽをとられないように逃げる、とりに行くというルールを守りながら楽しめるように声掛けをする ・一人ひとりに合わせた課題に柔軟に対応する ・声掛けや拍手でやる気を引き出す ・うまくできた時を見逃さず褒める ・参加者同士で関われるよう、座る位置、声掛けなどを工夫する ・皆で活動を共有する

動に誘い、わずかな時間でも他の参加者と一緒に楽しむ時間を作るよう心掛けています。

現在のプログラム実施上の課題として、参加者の人数の増加に加え、参加者の年齢層が未就学児から小学生に渡り幅広くなっていること、定期的に学生ボランティアの入れ替わりがあり、子どもとの関係づくりが難しいことなどが挙げられる。さらに、支援者が子ども一人ひとりの状態像を十分に把握できておらず、子どもが活動に対してどのような姿勢で臨んでいるのか、活動に参加することで何か変化はみられるのか、子どもの余暇活動に対して保護者がどのようなニーズを持っているのかなどについて把握できていないことも課題に挙げられる。

そこで本研究では、活動に参加している子どもの保護者にアンケート調査、およびインタビュー調査を実施し、子ども達の障害の状態像、余暇を中心とした日常生活の状況、レクリエーション活動における参加者の状況を把握することを第一の目的とする。また、子ども達が活動に参加するには保護者の意向も大きな要因となると考えられるため、活動に対する保護者のニーズを探ることを第二の目的とする。そしてこれらを通して、子ども達それぞれが楽しめる運動プログラムの検討と、保護者のニーズを充足できるプログラムの提供を目指したい。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査と分析の方法

まず、「チャレンジ」へ子どもを参加させている保

護者で研究協力の同意を得られた6名に対して、記述式のアンケートを実施した。アンケートでは、①子どもの障害について、②これまでの「遊び」の体験、③放課後や余暇の過ごし方、④「チャレンジ」についてなどの項目について記入を依頼した。次に記入してもらったアンケートにもとづいて、1対1の半構造化インタビューを行った。

インタビューの時間は一人約50分から100分で、インタビューの場所は、研究協力者に都合の良い場所を指定してもらい主に大学の教室を利用し行った。インタビュー内容は承諾を得た上で録音し、逐語記録におこしたものと、アンケートの内容とをあわせてデータ化し、KJ法を用い分析した。

2. 倫理的な配慮

研究協力者への倫理的な配慮については、大学の倫理審査に則り手続きを行った。研究協力者には、研究の趣旨や手続き、インタビューの方法やデータの取扱い方法について文書・口頭で説明し、全ての項目に同意を得て研究への協力の意志を確認した。

3. 研究協力者の概要

研究協力者のプロフィールは表2のとおりである。研究協力者6名は、月2回の活動へ子どもと共にほぼ毎回参加し、活動での子どもの様子を観察しており、活動内容についても十分な理解がある。活動参加歴は1年～3年で、また、6名中5名がきょうだいで参加している。その中で、きょうだいとも障害のあるまたはその疑いのある協力者は3名である。

表2 研究協力者プロフィール

保護者	参加者	障害など	所属	活動の参加歴	放課後等 デイサービスの 利用の有無
A	7歳・男	自閉症・知的障害（中度）	特別支援学校小学部	3年	有
	9歳・男	自閉症・知的障害（中度）	特別支援学校小学部		有
B	7歳・男	自閉症・知的障害（中度）	特別支援学校小学部	1年	有
	3歳・女	なし	幼稚園		無
C	7歳・女	広汎性発達障害の疑いあり	小学校普通学級	2年	無
	9歳・男	自閉症・重度精神発達遅滞（最重度）	特別支援学校小学部		有
D	5歳・男	広汎性発達障害・精神発達遅滞（軽度）	障害児通園施設	2年	無
	7歳・女	自閉症・精神発達遅滞（中度）	特別支援学校小学部		有
E	6歳・女	身体障害者手帳1級・療育手帳（重度）	特別支援学校小学部	1年	有
	3歳・男	なし	幼稚園		無
F	8歳・男	自閉症（軽度）	特別支援学校小学部	1年	有

Ⅲ. 結 果

のカテゴリーと19のサブカテゴリーが抽出された。以下にその結果を示す。

表3に示すように、保護者のインタビューから5つ

表3

カテゴリー	サブカテゴリー	会話データ
プログラムの有効性と子どもへの効果	居場所の獲得	T（きょうだい児）はすごい楽しみにいってる、行くのが楽しみ。H（障害のある子ども）もまあ楽しそうにはしてるけど。
		あのカレンダーをうちは1か月ずつ書いてるんですけど、学校とか書いてるんですけど、1番学校、2番体操教室って書いてたら楽しみにしてる。
		本人は、すごい楽しいみたいです、体操教室は行きたいもの、カレンダーに体操教室の絵を書いているんですよ。体操してるような絵を書いて、この日は体操教室だっているの分かるようにしてるんですけど、したら、それをじっと見てまだかなまだかなって。
		彼女が来たがるので。とっても楽しみにしてる。
		（活動に）行きたがってましたね。
	子どもの成長	ここにきたらそれがしたいとか、これはやだとか、はっきりこうね。（略）これがしたいとかわがままなんですけど、言えるようになった。昔はほんとただの受け身で、ぼおってしてた感じだった。
		自分のやりたいこと・楽しいことを自己表現するようになり、少しだけ体力がついたような気がします。
	運動の機会の提供	（活動を）全然嫌がらず楽しくちゃんとそれこそ体を動かすことやってるし、そのゲームのようなね、こともできてるし、以前は、体育館の隅で見ていただけでしたが、本人の興味のある活動は参加できるようになってきました。
		運動はね、させたい、やっぱ体を動かすっていうことはやっぱさせたいし、そのあんまり学校以外で歩くこともないんですよね。
	個別支援の有効性	うちはもう体操もできないの分かってましたから、あんなにもうマンツーマンでついでいただいて、走らせてもらって、もう言うことないです。
		『どういところが楽しいんだろう』やっぱ自由にさしてもらってる。
プログラムへの評価と課題	子どもの集団活動への不適応	お友達が走ってるのが好きなんですけど、見てるのが好きですね。
		あんまり集団でいろいろやるのは、一緒になか（プログラムが進められている体育館）にいるのは大丈夫だけど、一緒になんかしたりっていうのはなかなかやれない。嫌いっていうか分かんないみたい。
		（活動に）行きたいけど来たらあの子ほら一番が好きでしょ。
		（活動中）お友達と遊ぶっていうのは成立しないと思う。
	子どもの集団活動へのニーズ	せっかくね、お友達がこないっぱいいるのに、個々になんかこうしてたら、それじゃやあなんかね、一人で活動するのと変わらない。これだけ子どもがいるからせっかくここでほらみんなと交わるチャンスっていうか、それが苦手なんですけど、だけど親としてはそういうせっかく同世代の子達で、あの、関わる機会って学校以外でない、日中（日中一時支援）とかでしかないんで、こういうところなんですっていいし。
		1個だけでもできたら、なんか1から10までね、出来ない子達ばかりだと思うので、それはちょっと求めすぎだから、あの一つなんかこうお楽しみって言うか、なんかみんなが楽しく、苦にならずにできることが一つあればまあいいのかな。
		私はもう、一緒に、できれば一緒にしたいなとは思ってますけど。（子どもと一緒に参加できたという意味）
		H（障害のある子ども）と一緒になんかできることがあったら。
		もうちょっと体育館にいてくれたらいいなと思います。20分でも。
		（体育館の）中にいさえすれば何をしているのか分かって自分の能力で「これは興味がある」、「次の事はだめ」、「ストレッチはあんまり好きじゃない」、「ボールとか出てきたら大好き」とか、そういうのが自分で分かるけど、（体育館の）外に行ってしまうと全く何をしているかが分からなくなってしまっ。（略）見れば興味があることを多分やってるけど、外に出てしまうと何してるか全く子ども達がつかめなくなってしまっ。
	保護者の活動への参加の必要性	お母さんがちょっとこう一緒になったら、もうちょっと動くかもしれないし、まかせっきりではなくて、最初は一緒にっていう風にすると、（集団への）参加が出来るかもしれないかなって言うのは（思う）
		みんなもこう、お母さんが入ると楽しいと思うんですよ、お母さんが来たってなると全然気持ちがね、子ども違うんで、もしかしたらほら、活動にも、もっとぐっと集中できたりとか、お母さんがいるならちょっとこう頑張ろうとか、お母さんがこうするならお母さんと一緒にしたいとか思うかもしれない。
		みんなこうお母さんと一緒にいることで、活動にまず参加させるっていうのがもう、なんかスタート、スタートラインから立ててないんで。
		お母さんも一緒に入って、一つでも活動にお母さんも参加する、1から10までしなくても、一つぐらいはお母さんが一緒に活動すると、なんかこうあったらいいかなって思います。一つくらいだったらお母さん達も全然いいと思いますけどね。
		どこまで強く言ってもいいかわからないし、強く言ってしまう事さくかかっていてもあんまり聞かないしっていう感じだし。（略）（体育館の）外に出たらお母さんがちょっとついて行って、学生さんと一緒に声掛けしながら、で、学生さんはそれでほら、「あっ、お母さんがこんな言ったら入った」とかそういうのを教えないと教科書で書いてあっても実際のろんな子がいて・・・
		いや、その辺はやっぱ（親が）一緒に活動しないと、やっぱ声掛けにしてもケースバイケースなので、こういう時こうした方がいいとか、それはもう『見てから学ぶ』ともあるんかなと思います。

レクリエーション活動における家族のニーズ

		<p>やっぱ（体育館の）外に出た場合、やっぱお母さんがちょっと行ったりとかして、学生さんと一緒に言葉かけを子どもにして、なんかこういう時こういう風に言ってください、こういう風にしてくださいとか、まあ、そうならないときでも親と一緒にいけばどうにか連れてこれるじゃないですか。</p> <p>やっぱお母さんがこうサポートしないと難しい、学生さん丸投げではですね、ちょっと難しいかなとはちょっと思いますね。</p>
学生ボランティアへの評価と課題	学生ボランティアへの感謝	<p>みんなよくすごいな、よく頑張ってるなって思いますよ。</p> <p>学生さんにはほんとに感謝してる。必ず帰るときは「ありがとうございました。」と言って帰るようにしてるんですよ。子ども達は楽しいとか、ありがとうって思ってる言えないからですね、必ず私は言うようにしてる。</p>
	学生ボランティアの関わり方の未熟さ	<p>その子によって違いますもんね。なんかやっぱ慣れてないっていう感じ。あとしゃべったりあんましないですね、子どもにはちょっとしゃべったり、しゃべりかけてる感じはしますけど。私、分からないときなんか聞かれないし。</p> <p>やっぱ個人個人違うから、あんまり面倒なことはやりたくないな、みたいな方もいらっしゃるし、S（障害のある子ども）みたいな子ども、積極的に関わろうとされてる方もいらっしゃるし、それぞれだなと思いますけど。</p> <p>選べないですからね、そういう仕事に入ると、ああこの人ちょっと分からない、分からないとか嫌とかではやっていけないので、S（障害のある子ども）みたいな子もいるから、ああいう子がいるってことも分かってもらえる場面でもあるので、分かりやすい子ばかりじゃなくて、いろんな子がいるって、いろんなモデルがいるから、学生さんたちも・・・『積極的に』そうですね。</p> <p>子どもにあんま慣れてない感じはありますよね。なんか子どもが言い出したら、あーどうしたらいいか分からなくて感じで。</p>
	学生ボランティアの未熟さに対する寛容	<p>それ（障害のある子どもへの対応の工夫）ってもうほんとに、ずっと積み重ねてやってきたものだから、学生さん、福祉学科だからって、はいてやられても、それこそ声掛けひとつ、なんて声かけしたらいいのかも分からないよねって。それで当たり前だよ。</p> <p>やっぱ学生さんはまだ育児もしたことがないし、ましてあんな難しい子達をみるのはやっぱ手に余ると思うんですよ。</p> <p>子どもってこんなものって、なんとなく自分で思うのとガラッと違うでしょ、なんか障害があると。だけん、こうほんと戸惑うと思うんですよ。</p> <p>普段それこそ分からない状態で関わってもらってるから、それこそ大変だろうなって。</p> <p>普通に子育てもしてないのに、子どもにまずどう接していいのかわからない上に、言葉の疎通ができないでしょ。</p> <p>学生さんたちに強くな、こっちはいいよとか、やっぱできないと思うんですよ、人のお子さんやし、言ったからといって「はい」ってなる子やないし。</p> <p>（親に）聞きにくる暇もないですよ、あんなね、ちょろちょろしとうけん、目離すわけにもいかんし。</p> <p>子どもがいると話が出来ない。学生さんやっぱ子どもそっちのけで来れないけ、聞きそびれてるのかなとは思います。</p>
	障害のある子どもの親としての経験	<p>ほんと親しか分からないようなその言葉が、やっぱ（関わりが）なければそれこそ嫌がってるだとか、何がしたいとかっていうのって分かりませんもんね。</p> <p>ほんと私もじゃあ「S君（他の参加者）見とってねっ」って言われても、S君どうしたらいいかわかんないし。やっぱそういうもんだと思うんですよ。育ててるからこそ分かるとか。</p> <p>やっぱ、私たちが6年間、7年間の子達を見て育てて、なんとかかんとかこうやったら、こう動くとかいう技を生み出してきた。</p>
	子どもとの時間を共有する機会の提供	<p>子どもと一緒になんかする機会って意外とないんですよ。</p> <p>子どもとこうやってできるのってあとちょっとでしょ。（略）子どもっていう見ためも子ども、言葉にして子どもって違和感がないときにしかできない関わりとか、そういうのもなんかいいかなとか。（略）やっぱ小っちゃいうちにしかできないことを一緒に。（略）大きくなったときにですね、楽しかったねとかなるのかなとか。（略）こういうところだからこそできるし。</p>
	子どもの成長の発見	<p>親もなんかこう、親も自分の子どもの成長を見る機会っていうか。</p> <p>学校での様子を見ることは少なく、どこまでやれるかを知らなかったの、いろんなことに参加できていて驚きました。</p> <p>1年後2年後ってなったら、それこそみんな、やっぱちょっとずつだけ指示も入るようになるだろうし、何かできることも増えるだろうし、で、最終的に何かほんとにみんなが中学部高等部とかなったときに、こんなことが、最初はこんなだったけどすごいよねって、きつとなるからそれならそれで楽しみだと思う。</p>
	保護者の負担の軽減	<p>余暇を私以外の人と関わることで、負担が軽減しています。</p> <p>放課後に子どもが楽しみにしていることに連れて行くことで、親もストレスがたまらない。放課後のストレスが少し軽減した。</p>
	保護者同士の交流	<p>他のお母さん達との情報交換の場となっています。</p> <p>お母さん達とも情報交換できて良い。</p> <p>普段はなかなか会えない他のお母さんたちとの交流ができ、ストレス解消になります。</p>
	きょうだい児の参加	<p>ここに来ると、そのきょうだい児も遊ばせてくれるっていうのもあって、それならぜひ行きたいって思ってる。</p> <p>まだ小さいからあれですけど、やっぱゆくゆくはね、きょうだい同士で気の合う人を見つかったらなって思ってる。</p> <p>きょうだい児と一緒に参加できてよかった。</p>
	居場所の獲得	<p>ここにすればほら、分かっている方たち、障害を分かって接してくれる人しか周りにいないから、そういう目で大目に見てくれるし、他の健常のお子さんもないけん、気を遣う必要もないし、なんかこうそれで気楽。</p>

障害のある子どもの家族が抱えている困難	外出の困難さ	なかなか一人では二人相手できないので、そこが難しくって。
		T（きょうだい児）も大きいプール入ったことないですよ。H（障害のある子ども）を連れていけないので行けなかった。
		二人連れて外にもう行けないです。小っちゃいときはベビーカーに乗せて、片方手をつないでとか行ってたけど、二人、もうベビーカー乗せるわけにはいかないですよ。歩くスピードがこんな違うんですよ。(略)絶対みれない、外で二人、二人連れて出かけるとかもう絶対無理無理。(略) そんな無理して <u>事故とかするんやったら意味ないから</u> 、そんなら家にいた方がみたいな。
		やっぱりその公園に行っても <u>下の子は下の子で「お母さんこっち来て」って言うし</u> 、まあ上の子は一人で遊びますが、どこ行くか分からないんで、見とかないと。
		公園とか連れて行くにもきょうだいとかいたらこう行きにくいし、連れて行ったとしても <u>他のお友達がいるからみでいきづら</u> いとか、そういうの抱えてるんですよ。
	地域における居場所のなさ	夏休みどこか行くとこがないので。S（障害のある子ども）が <u>行ける場所ってない</u> ので・・・
		家に閉じ込めとくことしかできないので、まあ出ていく機会がね、なんか少ないので、もう行くところ、行く場所があるだけ嬉しいとかは言われてましたね。
		やっぱり対他人ってなった時に、やっぱりこんなに大きいのにルールが分かんなかったりとかすると、お母さんも <u>行きづらくなって行けない</u> とかになる。
		学校があんまり楽しくない、やっぱり同年齢の子とやりとりがうまくできないみたいで、楽しくないみたいで。多分学校ではあんなに笑ってないんじゃないかな。

注：「」は筆者の言葉。（ ）は筆者補足。

1. プログラムの有効性と子どもへの効果

このカテゴリーは、＜居場所の獲得＞＜子どもの成長＞＜運動の機会の提供＞＜個別支援の有効性＞の4つのサブカテゴリーからなる。

＜居場所の獲得＞では、子ども達に見通しをつけるために、保護者が自宅のカレンダーに記入した活動日を子ども達が理解し、活動を心待ちにして積極的に参加していることが明らかとなった。＜子どもの成長＞からは、活動に参加し、様々な体験を重ねることで、自己主張や自己表現が可能になったり、集団に参加できるようになったりなど、少しずつ良い変化がみられていることが明らかとなった。＜運動の機会の提供＞からは、プログラムの中に「体を動かす」ことを取り入れる必要性が確認された。＜個別支援の有効性＞では、多動があり場にとどまることが難しく、自由に動き回る子どもの保護者にとって、学生ボランティアが1対1でつき、子どもの安全を守りながら活動する環境が、安心や満足へとつながることが明らかになった。

2. プログラムへの評価と課題

このカテゴリーは、＜子どもの集団活動への不適応＞＜子どもの集団活動へのニーズ＞＜保護者の活動への参加の必要性＞の3つのサブカテゴリーからなる。

＜子どもの集団活動への不適応＞が示すように、参加者にはプログラムに沿って活動したり、対人関係を築くことが難しい子どもが多い。また極端に興味を示す範囲が狭く、なかなかこちらからの刺激に反応を示さない子どももいる。「一緒になんかしたりっていう

のはなかなかやれない」というのは、活動に参加している子どもの多くが共通して抱えている課題である。

しかし、＜子どもの集団活動へのニーズ＞からは、保護者は子ども達の特性を十分に理解した上でなお、出来ればわずかな時間でも、同年齢の他の子ども達「みんなと交わるチャンス」を無駄にせず、「苦手」な事であっても、皆で一緒に何かをするという時間を持つこと、そして短時間でもその場に居続けることを望んでいることがわかった。

さらに、＜保護者の活動への参加の必要性＞からは、保護者が自身もプログラムに参加することで、子どもの意欲を引き出せるのではないかと考えていることや、学生ボランティアに、子どもとの接し方や、場面によってどのような声掛けが適切かということについて、「一緒に活動」することを通して、アドバイスできると考えていることも確認できた。

3. 学生ボランティアへの評価と課題

このカテゴリーは、＜学生ボランティアへの感謝＞＜学生ボランティアの関わりの未熟さ＞＜学生ボランティアの未熟さに対する寛容＞＜障害のある子どもの親としての経験＞の4つのサブカテゴリーからなる。

＜学生ボランティアへの感謝＞では、保護者が学生ボランティアを活動にとって必要な存在であることを認め、感謝の思いをもっていることが確認された。しかし＜学生ボランティアの関わりの未熟さ＞では、自分から積極的に関わりを持とうとしない学生ボランティアの姿をよく観察しており、それぞれの動きの違いを見抜き、個人の力の差を認識していることが明らかとなった。さらに、重度の障害だから「分からない」

と諦めるのではなく、より積極的に関わりを持ち、一緒に過ごしながらどのように関わってゆけばよいのか学んでほしいと考えていることが分かった。

＜学生ボランティアの未熟さに対する寛容＞では、学生ボランティアは「育児もしたことがない」、「普段（の様子を）それこそわからない状態で関わってもらってる」などの理由から、子どもへの関わり方が不器用であっても共感を示していることが明らかとなった。また、＜障害のある子どもの親としての経験＞では、親だからこそ分かる子どもの特性、関わり方があると認識していることが明らかとなった。

4. 家族支援の有効性

このカテゴリーは、＜子どもとの時間を共有する機会の提供＞＜子どもの成長の発見＞＜保護者の負担の軽減＞＜保護者同士の交流＞＜きょうだい児の参加＞＜居場所の獲得＞の6つのサブカテゴリーからなる。

＜子どもとの時間を共有する機会の提供＞では、保護者にとって活動に参加することは、送迎や付添もあり負担も大きいと思われるが、それだけでなく子どもと一緒に体を動かすという機会を大切に、自らも子どもと関わろうという意欲的な姿がうかがえた。また＜子どもの成長の発見＞からは、活動がなかなか目にするのでできない子どもの姿を、客観的に捉えられる場としても意義があることが分かった。さらに今出来る事、出来ない事だけにとらわれるのではなく、仲間と関わりながら、体験を積み重ねていくことで身についていく力があるのではないかと、保護者が活動を長期的に捉え、経験を積むことの重要性を感じていることが分かった。

＜保護者の負担の軽減＞、＜保護者同士の交流＞では、活動の目的の一つでもある「保護者同士の交流の場を提供すること」が実現しており、わずかな時間であるが、活動が保護者同士の交流、ストレスの解消にもつながっていることが明らかとなった。また＜きょうだい児の参加＞からは、保護者にとって、活動に障害のないきょうだい児を参加させることは、きょうだい児の生活の経験を増やす機会、遊びを体験させる機会でもあることが示された。さらに、きょうだい児同士関わりを持つことで、「きょうだい同士の合う人」を見つけてほしいというような希望もあることが分かった。これは、障害のある家族がいるという同じ条件だからこそ、支える者同士のつながりを作るきっかけになるのではないかと保護者の希望の表れであると考えられる。

＜居場所の獲得＞からは、障害のある子どもを育てる家族にとって、「障害を分かって接してくれる人」の存在が重要であること、「健常のお子さん」がいる場では、「気を遣い」ながら行動している様子が伺えた。

5. 障害のある子どもの家族が抱えている困難

このカテゴリーは、＜外出の困難さ＞＜地域における居場所のなさ＞の2つのサブカテゴリーからなる。

＜外出の困難さ＞では、特にきょうだいがいる場合についての困難さが示されており、この場合、きょうだいの障害の有無に関わらず、大人一人で子ども二人を見守ることがいかに困難なことが明らかとなった。「事故とかするんやったら意味ない」からは、子どもが成長するにつれ、行動範囲が広がり安全を守るために物理的に外出が困難になる様子や、「下の子は下の子でお母さんこっち来てって言うし」からは、障害のある子どもときょうだい児それぞれの要求を満たすことが難しい様子が示された。また、「他のお友達がいるからみで行きづらい」など周囲に障害に対する理解がないために、保護者が周囲に気兼ねし、心理的に外出する機会が減少している様子が明らかとなった。＜地域における居場所のなさ＞からは、「行ける場所ってない」、「家に閉じ込めとくことしかできない」、「行きづらくなって行けない」など公的なサービスを利用していても、地域に障害のある子どもを連れて、気兼ねなく出かけられる場所が少なく、長期休みは特に家族にその負担がかかっていることが明らかとなった。

IV. 考 察

以上の結果から、スポーツ・レクリエーション活動に対する保護者の評価やニーズとして、以下のことが確認された。①子ども達は活動に積極的に参加し、少しずつ社会性やコミュニケーションの面での成長がみられるようになってきたこと、②保護者は、子どもが集団活動に参加する難しさを感じつつも、短時間でも「集団の中にいる力」をつけたいと思っていること、そのためには、③保護者自身の関わりも必要だと感じていること、④保護者は学生ボランティアに対して、彼らの振る舞いや子どもと向き合う姿勢を観察し、個別に評価していること、⑤活動は、障害のないきょうだい児にとっても意義があるということ、⑥保護者が活動に参加する動機は、地域に障害のある子どもを育

てる環境が乏しい事や障害に対する理解が広まっていない事にも関連しているということ、以上の6点である。

それらを踏まえて、今後の活動の指針となるよう以下の3点について考察する。

1. 集団支援と個別支援の有効な活用

今後活動を続けていくうえで、筆者らは、保護者も希望し筆者らも望んでいる「集団」で楽しむことを重視していきたい。学生ボランティアと1対1の関わりから、子ども達同士の関わりへつながるような手助けを続けていくことで、子ども達同士で遊びを楽しむ共有するという体験を重ねていく、さらにその体験の中で自己肯定感を感じられるような成功体験を重ねていく、そのような体験の蓄積が将来社会で他者と関わる力の土台になると考える。

しかし、保護者や支援者の目的と、子ども達のそれと同じではないということを、私たちは十分に理解しておかなければいけない。子ども達にとって、「集団」の場に身を置くことは非常にエネルギーがいることである。子どもの意に反し強制的にプログラムに参加させることになると、子どもの意欲をそぎ、活動の場が子どもにとって居心地の良い場ではなくなるかもしれない。子ども達が自分の思いを十分に伝えることができない分、どのような参加の仕方が一人ひとりにとって「快」の状態なのかを探っていくことが必要である。

現在の活動は強制的ではなく、一人ひとりが学生ボランティアに見守られながら、安心して遊ぶことができるという緩やかな雰囲気のある場であることが、子ども達一人ひとりにとって居心地の良い場となり、それらが魅力となっているのではないかと考えられる。余暇をどのように過ごすかは、本人の自由である。プログラムに沿って活動しなくても、その場に参加し、他者と関わりながら、自分が受け入れられているという感覚を持てる場を提供し続けていくことが大事であり、継続することで活動に馴染み、＜参加者の成長＞に見られるような力が少しずつついていくのではないかと考える。参加者すべてにこのような良い変化が見られるよう、工夫していく必要がある。

2. 保護者と学生ボランティアとのつながりによる集団支援の向上

ボランティアは、主に福祉学科の学生であり、障害については講義や実習、様々なボランティア活動等を通して体験を通じて学んでいる。また、活動に参加して

いる子どもの特徴については、保護者からの情報や、これまでの活動の記録、定期的なミーティングを通してボランティア間で共有している。しかし、参加している子どものことを理解するにはそれだけでは不十分であり、長期間子どもと様々な場面に共に過ごす経験の蓄積が、支援の向上につながると考えられる。しかし、学生ボランティアという性格上、長期的に子どもと関わるができない状況にある。さらに、活動中もその都度、参加者のメンバー構成によって担当する子どもが変わるため、継続して一人の子どもに関わることは難しいという状況である。

学生ボランティアは、プログラムの企画・進行を担うリーダーの役割と、集団の中で子ども達にリーダーの指示をわかりやすく伝え、子ども達同士がその場を共有できるようサポートする役割を担っている。また、全く集団での活動に参加できない子どもに対しては、共に行動し、子どもの世界を共有しつつ、プログラムへも参加を促す役割があるが、なかなか学生ボランティアが意図するように子どもは動いてくれないということも少なくない。そのような関わりが難しい子ども達と、試行錯誤しながら関わろうとする学生ボランティアに対しては、保護者からのねぎらいの言葉をかけられることも多い。学生ボランティアにとっては、直接子どもの反応を読み取りにくい状況であるため、そのような保護者からの声掛けは、次の活動に向けた動機づけにつながっていると考えられる。

また保護者は、親だからこそ理解できる子どもの言動があり、これまでの育児で培った経験をプログラム中にも活かすことができるのではないかと考えていることが分かった。保護者が活動に参加することで、子ども達のモチベーションもあがり、集団での行動が広がるかもしれない。保護者と学生ボランティアとのつながりをより深めていく役割を筆者らが担うことで、学生ボランティアの集団支援のスキルの向上を図る必要があると考える。

3. 障害のある子どもとその家族への活動を通じた居場所の提供

障害のある学齢期の子どもの放課後や長期休暇の支援として、近年、児童福祉法を基本とした放課後等デイサービス事業⁽²⁾や、学童保育への障害児加算・指導員の加配などがあり、活動に参加している子どもたちも皆、放課後等デイサービスを週3日～4日利用している。しかし、参加者に共通していたのは、「行ける場所ってない」もしくは「少ない」ということであっ

た。家族にとって、夏休みなどの長期休みは特に負担が大きい。また、障害のある子どもとそのきょうだい児を連れて外出することが、保護者にとって非常にエネルギーを要することであることも示された。このことは、きょうだい児にとっても、母親と共に過ごすことが多い幼児期は特に、外遊びをするような体験が制限されることにつながると考えられる。

保護者が障害のある子どもと共に外に出かけることに困難さを感じるのは、子どもの振る舞いや行動自体の要因と、それらに理解のない周囲の環境要因がある。今回の調査からも、障害に対する周囲の無理解により家族が外出を控えている様子が示され、「障害を分かってくれ人」の存在が家族には必要とされていることが明らかとなった。これらのことは活動に参加する動機にもつながり、保護者にとっては、活動内容だけでなく障害のある子ども、またはきょうだい児を連れて行くことが出来る環境が整っているかどうかということが、参加の重要な条件になっていた。

「チャレンジ」では、夏はプール活動を行っており、子ども達と一緒に地域のプールを利用している。プールという非日常の空間で子ども達の気持ちも高ぶりやすく、活動中子どもがパニックを起こすこともあるが、周囲の反応は冷ややかな場合が多い。短時間しか一緒に過ごしていない筆者らがそう感じるのであるから、家族はなおさらであろう。このような活動を続けることで、障害のある子ども達が行くことが出来る「場」を提供し続ける事、共に外出することで周囲への理解を広め、「障害を分かってくれ人」を増やし、彼らが行くことが出来る「場」を地域に増やすことも課題である。

V. おわりに

今回の調査では、一人ひとりの学校や自宅での様子について情報を得たことで、子ども達が好む活動を知ることができ、今後のプログラムに反映していくことが可能となった。活動の場を体育館やプールだけに限らず、野外レクリエーションなども取り入れて外に出て行くことも視野に入れ、子どもたち同士が同じ時間・空間を共有することができるよう工夫していきたい。今後さらに実践を続け、子ども達の変化を記録し、保護者・学生ボランティアとともに検討を重ね、子ども達一人ひとりにとって魅力のあるプログラムが提供できるよう努力したい。

引用・参考文献

- 上野一彦・牟田悦子：学習障害児の教育—診断と指導のための実践事例集—，日本文化社，1992
- 浦崎武，武田喜乃恵，崎濱朋子，木下秀美：発達障害のある小学生の子どもたちへの学生支援者による集団支援—他者との関わりを中心に—，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要No.9，137-146，2007
- 門脇厚司：子どもの社会力，岩波新書，1999
- 川喜田二郎：発想法 創造性開発のために，中公新書，1967
- 清水健司，齋藤崇，井上優香，川邊浩史，海塚敏郎：学習障害児との集団レクリエーション活動の取り組み，広島県大論集第41巻：第2号：245-256，2001
- 進藤拓歩・今野和夫：知的障害特別支援学校における「遊びの指導」—学習指導要領解説の「遊びの指導」に関する記述の分析—秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第35号，2013
- 仙田満：子どもとあそび—環境建築家の眼—，岩波新書，1992
- 津止正敏，立田幸代子：障害児・家族の生活実態と地域生活支援，京都・障害児放課後休日実態調査から，障害者問題研究，第32巻第4号：285-292，2005
- 野村寿子／〔対談〕野村寿子+佐々木正人：遊びを育てる出会いと動きがひろく子どもの世界，共同医書出版，1999
- 文部科学省HP：<http://www.mext.go.jp/>
- 山本佳代子：障害のある子どもへの余暇活動支援「チャレンジ」の実践とその課題，西南女学院大学紀要Vol. 16：77-83，2012
- 由谷るみこ・渡部匡隆：知的障害養護学校における夏季休業中の余暇支援に関する検討—保護者へのニーズ調査と余暇支援活動の事後評価から—特殊教育学研究，45(4)，195-203，2007

注

- (1) 文部科学省（2009）によれば、遊びの指導は、遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくものであると明記され、指導に当たって考慮することとして、環境設定や教師の対応、遊具等の工夫などが挙げられている。
- (2) 放課後等デイサービスとは、学校通学中の障害児に対して、放課後や夏休み等の長期休暇中において、生活能力向

上のための訓練等を継続的に提供することにより、学校教育と相まって障害児の自立を促進するとともに、放課後等の居場所づくりを推進するものである。

Research on Programs Catering to the Needs of Families in Recreational Activities for Children with Disabilities

Kayoko Yamamoto*, Kuniko Tsuzan*

<Abstract>

The authors carried out recreation activities for the families with children with disabilities in a university -challenge-. This study is to understand the needs of the parents of children participating in activities, aimed at providing programs suitable for each of the children. Research methods used one half-structured interview to the guardian of each child that participated in activities, the results of which were analyzed by the KJ-method.

As a result, five categories of «the effectiveness of the program and effect of children», «evaluation of the programs and problems», «evaluation of the student volunteers and problems», «effectiveness of family support», «difficulties for families of children with disabilities» were extracted. Those based on the discussion of program planning and management.

Keywords: children with disabilities, recreation, student volunteers, parents

* Department of Welfare, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University